

CAMD 報告会

(Center for Development of Advanced Medicine for Dementia)

特発性正常圧水頭症における 黒質線条体ドーパミン神経機能

脳機能画像診断開発部 病態画像研究室

文堂 昌彦 室長

平成28年1月21日(木) 16時00分～

第1研究棟2階大会議室

特発性正常圧水頭症 (idiopathic Normal Pressure Hydrocephalus, iNPH) では歩行や姿勢保持障害が特徴的であり、パーキンソン病類縁疾患 (進行性核上性麻痺、レビー小体型認知症など) における歩行障害との鑑別診断が重要である。本邦では 2014 年 4 月から、パーキンソン症候群の画像診断として [(123)I]FP-CIT (Ioflupane I 123, DaTscan) SPECT が保険診療適応となり、iNPH とパーキンソン病類縁疾患との鑑別診断における有用性に期待が掛けられている。黒質線条体ドーパミン神経機能の検査には、[(123)I]FP-CIT SPECT のほかに、18F-fluoro-L-dihydroxy phenylalanine (18F-DOPA) PET 検査などがあり、我々は過去に 46 症例の Possible iNPH に対し 18F-DOPA PET を実施し、iNPH における黒質線条体機能異常の割合、パーキンソン病類縁疾患合併の実態、シャント効果への影響、臨床経過を検討してきた。そして、[(123)I]FP-CIT SPECT の臨床応用が開始されてから約 50 症例の Possible iNPH に対して [(123)I]FP-CIT SPECT を実施し、臨床症状やシャント効果への影響を検討してきた。今回は、これら異なる二つの核医学検査法を iNPH に応用した経験を報告し、iNPH における黒質線条体神経機能低下の実態と、特に汎用化されつつある [(123)I]FP-CIT SPECT の iNPH 診療における有用性について検討をおこなう。